令和８年１２月２１日（日）　東奥日報【３面】

新たな挑戦へ
青森リンゴ植栽150年
第5部　提言④

若年層の消費増課題

弘前大農学生命科学部教授・石塚哉史氏

―県産リンゴの強みは。

「剪定などを使った従来の栽培方法である丸葉と、樹高を低く抑え品質を高めて省力化できるわい化、細い木を狭い間隔で植え生産効率を高める高密植―というように、栽培方法のバリエーションが豊富。年々消費者の嗜好が多様化する中、それぞれに合わせられる懐の深さは青森県だからこそ。国内外で評価されるリンゴ産地たるゆえんでもある。これからも維持していってほしい」

―生産量はだんだん減っている。

「国内全体の果樹産業のことを考えていくと、青森県が生産量を維持することは重要。長野県など他県の生産量はどんどん減っている。青森が支えていかないと、国内全体の生産量が減ることになり、値段が上がる。これまで多くの国民に愛されてきたリンゴが、高所得者層だけのものになってしまう」

―近年は猛暑で着色不良や品質低下などの問題が生じている。

「省力化が期待できる栽培方法とともに、夏場の高温などに対応できる品種の開発や栽培体系の導入も考えていく必要がある。これは試験研究機関や大学も含めて考えていかなければならない」

―今後、販売額を伸ばしていくために、海外で県産リンゴをどう売るか。

「長年の輸出先である台湾にはこれまで、贈答用の需要を中心に高品質なものを送ってきたが、『珍しい品種のリンゴも食べてみたい』というニーズも富裕層を中心に広がっている。まだ台湾にも輸出拡大する余地はある」

―観光・文化の面では、どのようにPRすべきか。

「日本一のリンゴ産地である弘前市を中心に、園地を巡るツアーや剪定枝、搾りかすを使った新しい加工品の開発なども進んでいる。こうしたものに触れてもらうことなどが考えられる。収穫体験などの体験型コンテンツを含め、新たな魅力を発信していくのが良いのではないか」

―青森リンゴの未来は。

「このまま高値が続き、庶民がリンゴから離れてしまうことが心配。主食のコメとは違い、なくても生きていける嗜好品だからなおさら。また現在、国内でリンゴ消費を支えているのは主に高齢者であり、75歳以上の後期高齢者が中心だ。若年層や中年層の消費拡大にどう導くかが喫緊の課題。今後も青森リンゴが続いていくため、生産量の維持とともに、国民に食べてもらえるようPRしていく必要がある」

（聞き手・野上圭佑）

※連載「青森リンゴ植栽150年」は今回で終了します。

＜いしつか・さとし　1973年、川崎市生まれ。東京農業大学大学院博士課程修了、2018年４月から現職。青森りんご総合戦略検討会議議長＞

この画像は，当該ページに限って”東奥日報社”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。